九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学芸術工学図書館改修の記録2019-23 ： 図書館からクリエイティブ・アクセスへ

伊原, 久裕
九州大学大学院芸術工学研究院 ： 教授

古賀, 徹
九州大学大学院芸術工学研究院 ： 教授

宮嶋, 舞美
九州大学芸術工学図書館

池田, 美奈子
九州大学大学院芸術工学研究院 ： 准教授

他

https://hdl.handle.net/2324/7153583

出版情報：2023-03-31. Kyushu University Design Library
バージョン：
権利関係：

九州大学

芸術工学図書館
図書館から
改修の記録
クリエイティブ・アクセスへ
2019-23

芸術工学図書館の改修にあたってまず考えたのは、「生きた図書館」とはどういうものか、ということであった。死んだ図書館ではなく生きた図書館、これを実現するにはどうしたらよいか。

……

大学といえども今日の活字離れの状況から決して無縁ではない。それは芸工の図書館においても顕著である。そこで芸術工学図書館がまずもって重視すべきなのは、膨大な資料をたんに集積し死蔵するのではなく、むしろ資料を厳選し、それをデザインの実践にいかにつなげていくかという視点である。そしてその制作実践がなされている状態を、あたかも一種の資料であるかのように保持すべきなのである。現在の活動状態とその活動のアーカイブをネットワークや対面でつねに発信可能な状態にしておくこと、そしてその実践状態に数多くの学生や教職員や外部の人々が活発にかかわり続けていること、これこそが、今回の改修のコンセプトである「クリエイティブ・アクセス」の第一の内実である。

（古賀　徹［前芸術工学図書館長］「芸術工学図書館とは何か」より）

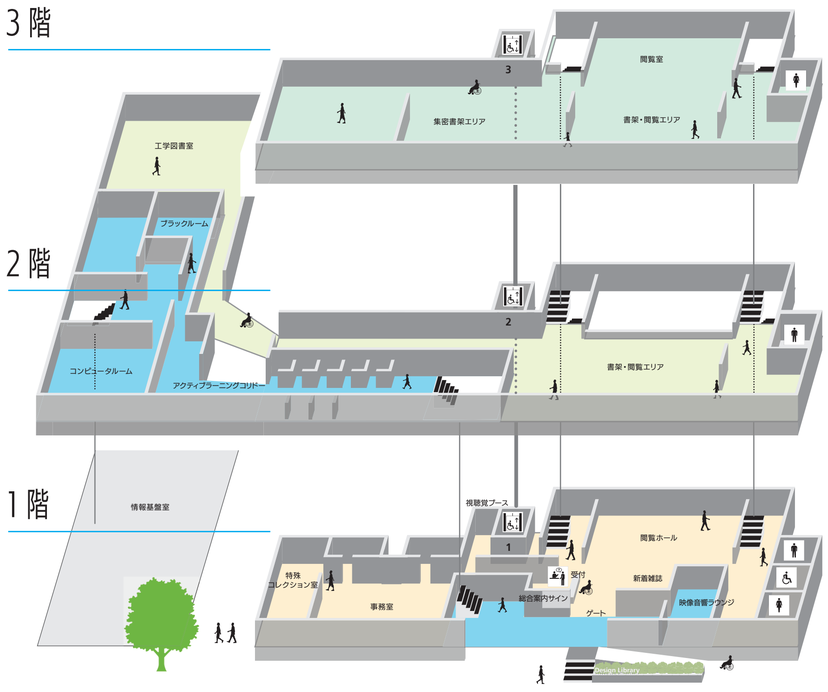
はじめに 芸術工学図書館のアップグレード

伊原久裕

芸術工学図書館の前身である九州芸術工科大学附属図書館が開館したのは 1972 年、それから 50 年後の 2022 年から 23 年にかけて図書館開館以来の大改修が行われました。

まずそれまで噴水広場に背を向けて反対側にあった入口が 180 度回転し広場側に開かれました。さらに隣接する情報基盤室と架橋されました。しかしこのたびの改修はたんに建物の物理的改造にとどまるものではありません。大橋キャンパスのクリエイティブな学びの場を創出するコンセプト「クリエイティブ・アクセス」の実現が改修を進めるうえでの目標でした。このコンセプトの策定の経緯は別項に詳しいですが、コンセプトは具体的に図書館内部のそこかしこに反映されています。「アクティブラーニング・コリドー」と呼ばれる細長い回廊と、その名と一見対照的な閉鎖された小部屋群、静謐を求められる図書館に不釣り合いな映像音響ラウンジ、など。これらは芸術工学部ならではのクリエイティブな活動を誘発するための仕掛けとして構想されました。他方、館内ゲートをくぐるとそこは静謐な書物の森の空間です。両者の空間が隣接し、知的作業と身体的作業とが接触し互いに触発される新たな学びの場が、新生芸術工学図書館です。

このリーフレットは、その誕生に深く関わられた方々の仕事を記録し、新しい図書館の見所を紹介するために編まれました。



配架 芸術と技術をつなぐ本の森

宮嶋舞美

芸術工学図書館の配架の大きな特徴は、芸術と技術の融合という芸術工学の理念を尊重し、2 階に「芸術」「科学」「技術」分野の図書を集めていることです。改修後、芸術分野の図書等を全て NDC（日本十進分類法）順にマージしたり、コレクション資料を全て特殊コレクション室に集約するなど、シンプルな配架になるよう心がけています。新しくできた工学図書室も含め、改めて 2 階の図書の配架の意味を体感してください。

2 階：芸術工学の森と科学の道

芸術工学の使命は芸術的感性と科学的知見を以て優れた技術を生み出すことであり、芸術と工学に分断できるものではありません。この体系を表現するため、2 階の書架エリアに「芸術」分野、新設の工学図書室に「工学・技術」分野の図書を配架し、その間に「自然科学」の図書を配架しています。芸術の森から工学の森に続く科学の道は、優れた技術が科学に立脚している以上、避けては通れない道です。

1 階：すぐに読みたい資料と快適な閲覧・視聴空間

1 階は資料は少なめですが、吹き抜けの下に大きな閲覧テーブルやソファがあり、ゆったりと本が読める空間になっています。エントランスそばの大きなソファの近くには雑誌の最新号を置き、すぐに手に取って読めるようにしています。また噴水を臨む窓際デスクのそばに語学試験対策や就職活動などに役に立つ図書を集めたコーナーを設け、勉強したりひと息ついたりする場となっています。視聴覚ブースのそばには CD/DVD などの視聴覚資料があり、大音量で楽しみたい人は映像音響ラウンジでも視聴できます。

お宝眠るコレクションルーム

1 階の奥には特殊コレクション室があり、ロイド・モーガン建築関係のコレクションなどの貴重資料があります。水の習作のスケッチなどが新図書館のサインにも使用されていますが、芸術と科学の一体性を追求したレオナルド・ダ・ヴィンチの手稿集もここに集められています。

3 階：人文社会科学の森と雑誌の森、名作椅子と楽譜

3 階には哲学、歴史、経済学、政治学、文学など人文社会科学の図書が配架されており、その充実ぶりは芸術工学という分野の裾野の広さを示しています。隣の集密書架には文庫・新書や「新建築」などの数多くの雑誌のバックナンバーがあります。また色とりどりのガラスの IROMIZU ART の前に名作椅子コレクションが並ぶ閲覧室には、楽譜や九州芸術工科大学時代の資料などがあり、様々な感性を育む場となっています。

経緯 図書館改修までの道のり

池田美奈子

芸術工学図書館は 1972 年の竣工から 3 度の増築はあったものの 50 年が経ち、老朽化が進んで、各所に問題が生じていました。図書館改修が現実味を帯びてきたところで、対症療法的な解決策ではなく、根本的に課題を整理して、時代に合った図書館のビジョンを描く機運が高まってきました。

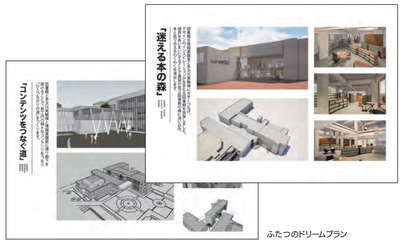
2019 年 8 月に、芸術工学図書館将来構想委員会が設置され、デザインの各分野を専門とする教員が委員となり、図書館職員とともに未来の芸術工学図書館像を議論することになりました。翌月 9 月の将来構想委員会では、学生や教員、図書館職員が一緒に、自分たちが使う図書館を自分たちでデザインする「コ・デザイン（Co-Design）」の方針が決まりました。そして後期が始まる 10 月にはプロジェクト形式の授業の一環として、芸術工学府と統合新領域学府の大学院生 9 名が参加するプロジェクトチームが立ち上がり、コ・デザイン・プロジェクトが始動しました。

学生たちは、まず図書館に潜入して自由にリサーチを始め、たくさんの気づきを得ました。多くの学生が書架の陰になるような席に好んで座っていることや、図書館には影刻や学生作品、家具など本以外の面白い物がたくさんあることも見えてきました。図書館と情報基盤室、そして多次元デザイン実験棟を空中でつなぐという以前からあった構想が復活したのもこの議論の中でした。また、エントランスを噴水広場側に移してはどうかという案も浮上しました。

後期の授業も終わりに近づいたころ、プロジェクトチームは「コンテンツをつなぐ道」と「迷える本の森」の 2 つのドリームプランの提案をまとめ、関係者にプレゼンテーションしました。提案に込められたアイデアは、改修後の図書館の随所に反映されています。

コ・デザインプロジェクトの締めくくりは、学生や教職員の意見を広く集めるためのマンリー（学食）での 2 日間のギャラリ展示でした。展示を見た人にスマホでアンケートに答えてもらうという仕掛けです。アンケートでは賛否両論、予想以上の数の意見が集まり、さらに SNS 上でも話題になり、非常に刺激的なコ・デザインプロジェクトとなりました。

次は、プランを現実に落とし込む作業です。まず、予算申請をするにあたり、3 つの建物をハードとソフトの両面でつなぐというコンセプトからプロジェクト名を「クリエイティブ・ブリッジ」としました。しかし多次元デザイン実験棟が連結構想から外れ、また「ブリッジ」という言葉のイメージがハードを強く想起させることから、最終的には「クリエイティブ・アクセス」に決まりました。「アーカイブへのアクセス」「専門間のアクセス」「グローバルアクセス」「ユニバーサルアクセス」の 4 つのアクセスポイントをもつコンセプトを打ち出し、2021 年 12 月に改修の実施が正式に決定され、具体的な設計のステップに踏み出しました。



ふたつのドリームプラン

建築 「残しながら、創っていく」

語り手　岩元真明
聞き手　岩堀綾香

◉改修設計の方向性

今回の改修設計の目的は「図書館と情報基盤室の一体的改修によるスペースの合理化・活性化」でした。膨大な蔵書の保管が課題となっていた図書館と、学生たちが自分の PC を持つようになって利用者が減少した情報基盤室を一体化することで、両者の課題を同時に解決することを目指しました。

改修のコンセプトは「かつての図書館の価値を残しながら新しい価値を創っていく」というものです。図のように、図書館側の「レストレーション（restoration＝修復）」と情報基盤室側の「リノベーション（renovation＝更新）」のアプローチを共存させることで、それぞれに対する改修の考え方の対比が楽しめる設計となっています。改修前の図書館がそうだったように、学生が1人で静かに読書したり、勉強したりできる環境こそが、キャンパス内の他の場所にはない図書館の価値だと思っています。そのため抜本的な改修ではなく、要所の整理整頓を丁寧にしていけば、図書館の価値は最大化できると考えました。

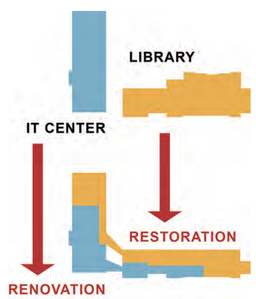
◉残した物と創った物

改修にあたって館内の物を一通り調査して、それぞれが持つ価値を見極めました。その価値に基づいて残した物には、スペインのカタルーニャ州と福岡市の交流事業の一環で展示するために、スペインから輸送され、職人の手で組み立てられたガウディの有名な〈サグラダファミリア〉の模型や、九州芸術工科大学時代に本学で教えていた工藤卓先生が学生と一緒にデザインした机などが挙げられます。当時、工藤先生の机に合わせて購入されたトーネットの椅子〈FLEX 2000〉は、座面を張り替えるなど修理して使えるようにしました。また、閲覧ホールの壁面タイルや円形の天井照明など、3 度の増築工事を経て隠れたり失われたりした物を当時の姿で蘇らせたことも今回のこだわりです。

情報基盤室の活性化に向けては、新たに〈アクティブラーニング・コリドー〉や〈ブラックルーム〉を設けました。どちらも学生が自由に利用できる作業環境として構想した空間です。さらに展示と発表の場として〈映像音響ラウンジ〉を、図書館のゲートの外側に配置し、キャンパス内外の人がたくさん訪れるきっかけになればいいと考えています。

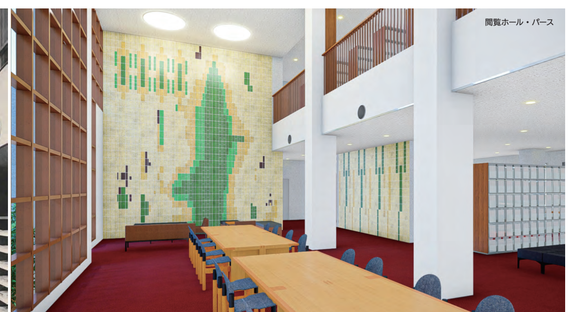
◉新しい図書館への期待

改修後の図書館は、逆説的に聞こえるかもしれませんが、改修前のように使ってほしいと思っています。学生と一緒に設計を進める中で判明した、芸工生が図書館に求める意外な姿は「隠キャがボッチで作業できる場所」でした。こうした芸工ならではの雰囲気を残しながら、改修後の図書館を活用してもらいたいです。それから、渡り廊下でつなげた情報基盤室にも人の流れができて、多くの学生や教職員が利用するようになるとよいと思っています。改修前の図書館の価値を残しながら、新たな価値を取り入れたこの図書館が今後どのように利用されていくのか、自分自身も楽しみです。



基本コンセプトのスキーマ

竣工当時のロビーと螺旋



閲覧ホール・パース

サイン 「点と点をつなぐサイン」

語り手　工藤真生
聞き手　石関駿太朗

◉サイン計画について特に意識したこと

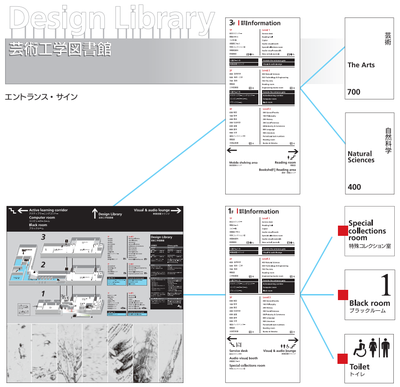
まずきちんと情報が届くということを意識しました。図書館は本を探すことがメインだと思うのでその場所に行き着くためにはどのようなタイミングでどんな情報が来るといいかを考えています。総合案内だけで情報を与えても、来館者は考え事をしたりしながら移動するので忘れてしまいます。例えば芸術の本を探している人には、移動の間にも目に入るように目的の場所を表すサインを置くようにしています。1 箇所で全部を伝えて終わりではなく、人の移動とともに情報が伝わり点と点をつないで目的の場所に導くサイン計画を考えました。

◉サインの色を決定した経緯について

肝心の情報が届きにくくならないように色の数を抑えました。ただ、白と黒だけでは無機質なのでさまざまな諧調のグレーを使い、さらに暗い感じにならないようにポイントとして赤、そして反対色で他の色と馴染みやすい青を使っています。特に赤については 2 色覚の方に配慮して黒との判別がしやすく、かつ他の色との相性がよく、家具や建築で入ってくる色も邪魔しないように試行錯誤して決定しました。

◉サインを通して図書館に期待すること

自分も学生も、図書館には目的の本を探しに行って見つけたらそのまま出てくるというようにピンポイントでしか利用していないと感じていました。これは図書館の中にいても情報がなかなか目に入ってこないからだと思います。図書館の楽しさは、何かを探しながら同時に他のさまざまな発見ができることです。色々な情報が来館者の目に入るようにサインに遊びを持たせることで、図書館が改組後の芸術工学部や大学院芸術工学府のコンセプトである専門コースを横断するような学びが実現できる複合的な場であってほしいと思います。



什器 「建築と調和する家具」

語り手　秋田直繁
聞き手　岩堀綾香

◉改修にあたって心がけたこと

今回の改修では造作家具のデザインと什器などの選定に携わりましたが、その際に心がけたことは建物との調和です。まずは、かつての図書館の価値を残すという改修コンセプトに沿って、元々図書館が持っていた家具のなかから残す価値のあるものを選定し、必要に応じて修理を検討しました。次に、新たに購入する家具の選定を行うと同時に、柱や壁などのサイズに合わせる必要がある〈受付カウンター〉や〈窓際デスク〉はオリジナルで造作することにし、そのデザインを担当しました。

◉造作家具のデザインプロセス

特にこだわったのは〈受付カウンター〉です。職員が応対する受付と、利用者用の端末が置かれるのですが、ここには大きな柱があり、カウンターが2つに隔てられてしまうという問題がありました。検討の末、受付部分のカウンターを柱のボリュームに合わせ、ちょうど柱を横に倒したような形状にすることを思いつき、柱も含めたカウンター全体の「かたまり感」を生み出しました。さらに、下がすぼまった形にすることで、利用者が近づいたときに足先がカウンターに当たらないように設計しています。しかしこの設計には安定性のリスクが伴ったため、1/1 模型をつくって厳密な調整を行いました。実際に図書館職員の方にも来ていただき、利便性に関しても十分に検討を重ねました。

また、家具作りには「微細な部分までのこだわり」が必要です。例えば、カウンターのアール（＝角の丸み）です。天板の端部の模型を実寸大で作成し、2 つのアールの構成のバランスや触り心地を確かめ、「丸すぎると野暮ったくなる、しかし利用者を迎えるためには角を立たせたくはない」といった試行錯誤を繰り返しました。

実寸大のアール模型

◉新しい図書館への期待

全ての方に気持ちよく利用してほしいです。〈受付カウンター〉は、職員と来館者をつなぐ接点として両者の快適さをとことん追求しました。また、学生に向けては、造作した家具が「生きた教材」となることを意図して、この家具デザインのプロセスを授業でも説明しようと思っています。

受付カウンター・パース

音響 「図書館のなかに出島」

語り手　城　一裕
聞き手　中原貴志

◉図書館改修で実現したかったこと

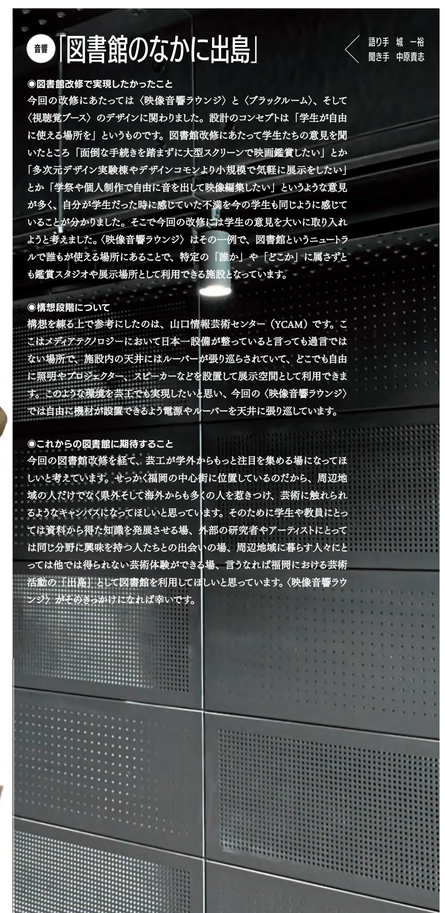
今回の改修にあたっては〈映像音響ラウンジ〉と〈ブラックルーム〉、そして〈視聴覚ブース〉のデザインに関わりました。設計のコンセプトは「学生が自由に使える場所を」というものです。図書館改修にあたって学生たちの意見を聞いたところ「面倒な手続きを踏まずに大型スクリーンで映画鑑賞したい」とか「多次元デザイン実験棟やデザインコモンより小規模で気軽に展示をしたい」とか「学祭や個人制作で自由に音を出して映像編集したい」というような意見が多く、自分が学生だった時に感じていた不満を今の学生も同じように感じていることが分かりました。そこで今回の改修には学生の意見を大いに取り入れようと考えました。〈映像音響ラウンジ〉はその一例で、図書館というニュートラルで誰もが使える場所にあることで、特定の「誰か」や「どこか」に属さずとも鑑賞スタジオや展示場所として利用できる施設となっています。

◉構想段階について

構想を練る上で参考にしたのは、山口情報芸術センター（YCAM）です。ここはメディアテクノロジーにおいて日本一設備が整っていると言っても過言ではない場所で、施設内の天井にはルーバーが張り巡らされていて、どこでも自由に照明やプロジェクター、スピーカーなどを設置して展示空間として利用できます。このような環境を芸工でも実現したいと思い、今回の〈映像音響ラウンジ〉では自由に機材が設置できるよう電源やルーバーを天井に張り巡っています。

◉これからの図書館に期待すること

今回の図書館改修を経て、芸工が学外からもっと注目を集める場になってほしいと考えています。せっかく福岡の中心街に位置しているのだから、周辺地域の人だけでなく県外そして海外からも多くの人を惹きつけ、芸術に触れられるようなキャンパスになってほしいと思っています。そのために学生や教員にとっては資料から得た知識を発展させる場、外部の研究者やアーティストにとっては同じ分野に興味を持つ人たちとの出会いの場、周辺地域に暮らす人々にとっては他では得られない芸術体験ができる場、言うなれば福岡における芸術活動の「出島」として図書館を利用してほしいと思っています。〈映像音響ラウンジ〉がその窓口になれば幸いです。



情報 図書館の軌跡と基本データ

1968（昭和43）年	4 月	芸術工科大学創立とともに芸術工科大学附属図書館設置。
	6 月	開館。
1972（昭和47）年	9 月	新築の附属図書館（C-3、1151 ㎡）開館。
1979（昭和54）年	1 月	西側部分に 135 ㎡の増築。
1985（昭和60）年		名前のない机（工藤卓氏設計）の制作。
1987（昭和62）年	12 月	西側部分に 403 ㎡の増築。
1994（平成6）年	8 月	身障者用エレベータおよびトイレの設置、3 階雑誌閲覧室を増設。
1998（平成10）年		「カタルーニャの熱い風」開催。
2003（平成15）年	10 月	九州大学と九州芸術工科大学の統合により九州大学附属図書館芸術工学分館となる。
2010（平成22）年	10 月	3 階雑誌閲覧室に IROMIZU ART 設置。
2021（令和3）年	12 月	補正予算で改修工事決定。6 月より工事開始。
2023（令和5）年	1 月	竣工。6 月リニューアルオープン（予定）。

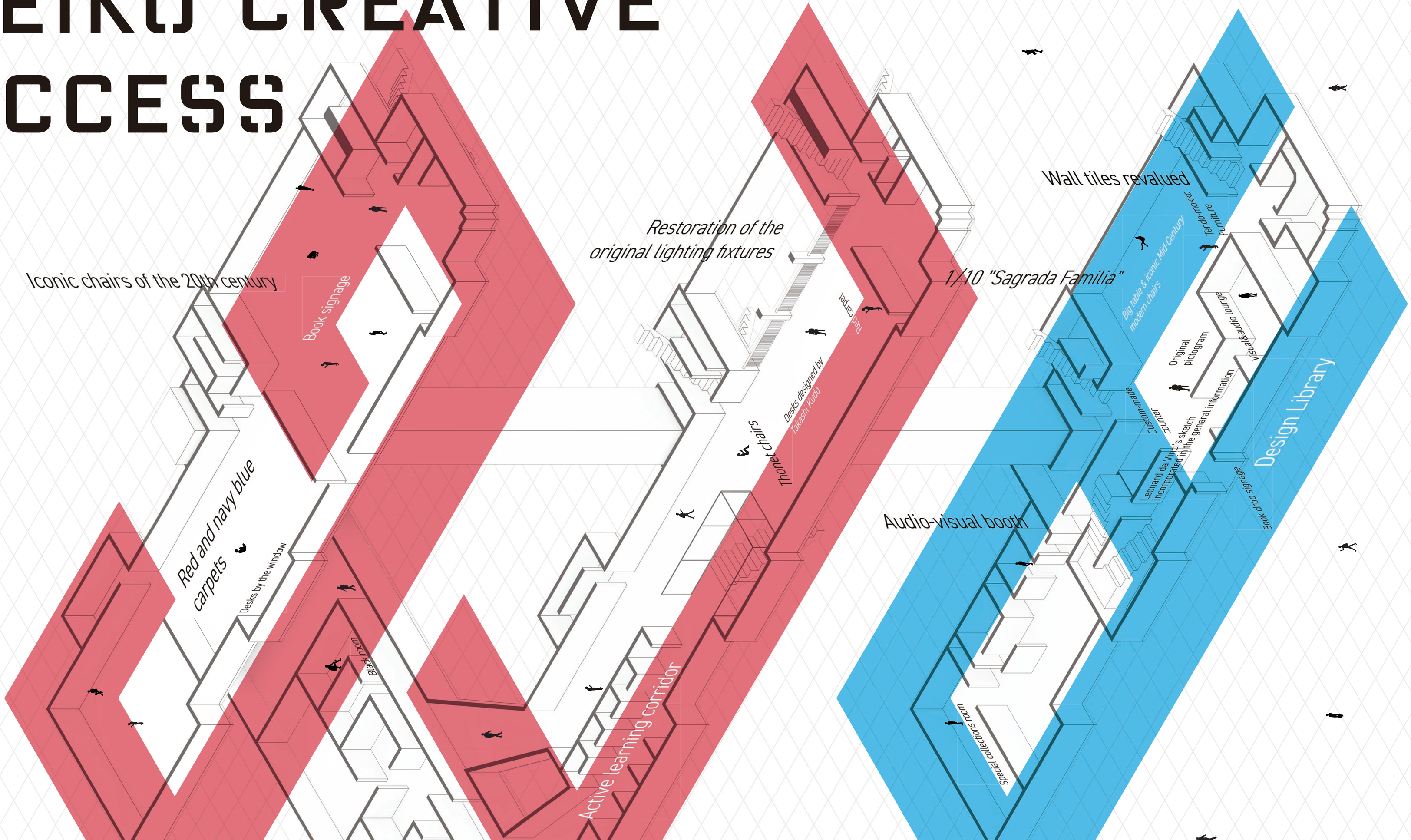
◉面積
旧図書館 1835 ㎡
新図書館 1816 ㎡（工学図書室を含めると 2003 ㎡）
◉座席数
旧図書館 186 席
新図書館 152 席

芸術工学図書館将来構想委員会（2019-2023）
伊原久裕（委員長／芸術工学図書館長）、古賀　徹（前委員長／前芸術工学図書館長）、
秋田直繁、池田美奈子、岩元真明、鵜飼哲矢、牛尼剛聡、城　一裕、藤　智亮、森本有紀

制作：伊原久裕、池田美奈子、宮嶋舞美（芸術工学図書館）、
岩堀綾香（メディアデザインコース）、石関駿太朗（メディアデザインコース）、
中原貴志（メディアデザインコース）、星野純平（修士課程メディアデザインコース）
イム・ドンファン（博士後期課程コンテンツ・クリエイティブデザインコース）

2023 年 3 月 31 日発行

GEIKO CREATIVE ACCESS



Restoration of the original lighting fixtures ｜ 竣工当時を再現した照明

吹き抜けを照らす大型の丸照明は竣工当時の照明を再現したものの、3度の改修の過程で別の意匠な花形の照明に置き代えられていたが、今回の改修を機にオリジナルを再現、復活させた。

Desks designed by Takashi Kudo ｜ 工藤卓氏の机

九州芸術工科大学の教員だった工藤卓氏が1985年にデザインした自習用の机。学生たちと一緒に図面を描いてモックアップをつくり、大川の工場で製作された。天板はブナ材、天板裏には3ブナより硬いサクラ材を使うことで耐久性を高め、また輸送のしやすさを考えた組み立て式の構造になっている。

Iconic chairs of the 20th century ｜ 20 世紀の名作デザインチェア

20 世紀のデザイン史を彩るデザイナーたちの椅子の数々。ファン・デル・ローエの（バルセロナチェア）やフロイヤーの（ウシリーラウンジチェア）、アールトの（パイミオ・チェア）、ジョージ・ナカシマの（ラウンジチェア）、グーリーの（ウィグルサイドチェア）などがある。これら巨匠たちの手になる椅子に座ることもできる。

Thonet chairs ｜ トーネット社の椅子

改修前の図書館 2 階で使用されていたトーネット社の（FLEX2000）は、工業的な大量生産のデザインした机との調和を考えて選定された。近代デザインに色を残す曲木の椅子で知られるトーネット社だが、この椅子はプラスチックと木材という異素材の組み合わせにより見た目と耐久性、スタッキングもできる点で機能的にデザインされている。改修後の図書館でも座面を張り替えて引き続き使用される。

Book signage ｜ 図書分類のサイン

人の移動とともに必要な情報が次々と目に入るようにデザインされたサインシステム。階段を上ってすぐ社を向くと眼にある配架分類の情報まで見渡せ、どんなジャンルの本が為るのか空間的に把握できる。環境に優れ洗練されたサインシステムだ。

Active learning corridor ｜ アクティブラーニング・コリドー

個人またはグループで活用できる学習スペース。オンライン授業を受ける場所としても使利な廊付きの廊下。多くの音や声を伴う作業にも適した空間となっている。

Black room ｜ ブラックルーム

大画面モニターと高性能スピーカーシステムを備えたプレゼンテーション用の部屋。個人制作・共同制作問わず作業に集中できる。公共に活用しようったプレゼンの場所である事を忘れずに。

Desks by the window ｜ 窓際のデスク

各デスクに照明スタンドが置かれ、コンセントも完備しており、自由に読書や勉強ができる。明水を眺め静かで快適な空間は作業がはかどることに間違いない。

Restored wall paint "Zolscoat" ｜ 復元塗装されたソラコート

竣工当時と同じ（ソラコート）カーに特注したジェル状入魂のスプレーを使用して復旧した。ドロな学習版の廊下は改修工事のオリジナルより拡がり広いことから、広さが大幅な図書館マニアだ。

Red and navy blue carpets ｜ 赤と紺色のカーペット

1 階の閲覧スペースには、図書館の竣工当時に使われていたレッドカーペットが敷況している。プロア全体では紺色パランスを考えて赤と紺の2色が使用されている。

Wall tiles revalued ｜ 復旧されたタイルの再評価

吹き抜けの壁一面に広がるタイル装飾。竣工当時から変わらない姿で残されてきたが、長年（サグラダファミリア）の模型の陰に隠れてしまっていた。今回、模型の移設によってその全貌を観賞できるようになった。

Big table & iconic Mid-Century modern chairs ｜ ビッグテーブルとラモチェリーのデザイナーズチェア

吹き抜けの廊踊ホールにある巨大なテーブルはマルニ木工の（MALTA）だ。流行に左右されないデザインと堅牢さをコンセプトとしたMARUNI コレクションのひとつで、改修後の図書館とともに歴史を重ねていくだろう。テーブルの周りにはウェグナーの（Y チェア）、タピオヴァーラの（ドムスチェア）、ヤコブセンの（グランプリチェア）といった代表的な北欧デザインの椅子が並んでいる。そして（イームズチェア）も。

1/10 "Sagrada Familia" ｜ 1/10 分の 1 の（サグラダファミリア）

アントニ・ガウディの（サグラダファミリア）の 1/10 石膏模型。1998 年に製造されたオブジェ。大規模なプロジェクトで知られたガウディ。ニ州と心の市民文化交流イベントで展示された後、大規模キャリバスに保管されていた。今回の改修でも保存が決まり、展示場所を移して「唯一無二の存在」となった。

Tendo-mokko Furniture ｜ 天童木工家具

改修前の図書館では、天童木工の転倒が実用家具として随所に使われていた。改修後の図書館では、実用家具の歴史を知るための資料的な価値も持つ、美しいウッドフレームと取り外しができるクッションが特徴のHaco チェアは新時象のデザイン。好を寝わず、どの面を上にしても水平になる構造の（ムライスツール）やスタッキングチェアやテーブル（T-2001）などが、シンプルで機能的なジャパニーズモダンの思想を語っている。

Special collections room ｜ 特殊コレクション室

芸術工学図書館は、希少なコレクション資料を所蔵している。なかでも代表的なものは、ニューヨークのテストリアホテルの設計を手掛けたロイド・モーガン（1892-1970）コレクションだ。建築物の図面、写真集に加えて、建築家帳、美術史、造園、工芸デザインなど、多くの関連資料もある。

Audio-visual booth ｜ 視聴覚ブース・再生機器

アナログからデジタル、まで多種多様な再生機器を備える視聴ブース。MD（ミニディスク）や LD（レーザーディスク）VHS ビデオなど、現在では使われなくなったタイプの媒体も再生できる。

Visual & audio lounge ｜ 映像音響ラウンジ

プロジェクターとスクリーンを使った映像鑑賞に利用できる、防音設計で、図書館の中にありながら遠慮なく音を出せる、映像音響ラウンジの左片にはルーバーが設置され、天井から吊り下げる自由度の高い展示に対応している。解体物の展示場所としても大いに活用したい。

Custom-made Counter ｜ オリジナルデザインの受付カウンター

側板が下に向かって内側に入った船のような形は来館者の足がカウンターに接触しないように設計された。隣に立つ大きな柱に向けたボリューム感を出すために、天板の素材は実板ではなくオークの集成材が用いられている。角の丸みから天板の厚行サイズを下で、職員と来館者の使い心地がとても良さされたデザインカウンター。側面には装作が難しい横方向の木目がある工板用された。

Leonardo da Vinci's sketch incorporated in the general information signage ｜ 総合案内サイン

環境グラフィックとしてふさわしいサインの美しさを演出するために、芸術工学を象徴し、かつ芸術工学図書館に所蔵されているレオナルド・ダ・ヴィンチの図案から生命や、機何学、建築図面などが用いられた。

Book drop signage ｜ 返却ボックスサイン

壁に直接取り付けられた立体的な（Book drop）のサイン。目の高さに合うように設置されており、側面の黒い塗装が目を引く。

Entrance signage "Design Library" ｜ （Design Library）エントランスサイン

図書館の顔として、ここが一目でわかる記号として設計されたサイン。視認性の高い書体として、英文はフルティガー、和文は芸術工学明朝の（ハウス書体の K-UD 角ゴシック体が採用された。他の建物とのバランス、防照の明次や触文込みの高さなどを計算し、展開と調和するようにデザインされている。